

シエル

流星ノア

広場の噴水で銀色の髪色の少女が噴水の様子を見ていると

「彼女かわいいねー ちょっと遊ばない？」

と、若い男のグループが少女に寄りかかり際に話しかける

いわゆるナンパだ

少女は戸惑った挙句うるうるした瞳で噴水を見つめて困っていた

そんな時だった

「こーら、やめなさい 嫌がってるでしょ？」

「なんだよ...ってシエルさん！？」

若い男のグループがケンカ腰に振り向いたその女性の声は

シエルの喝だった

シエルに怖がっている訳ではない

シエルはお嬢様だからだ このエデンニュートリアと言う都市の長である

ジェミニ の娘であったからだ

「もう チョコもだめじゃない あんたいつも元気なんだし なんで今日に限って断れないのよ」

銀色の髪のチョコという少女は 噴水をずっと見続けていた

うるうるした瞳で水面を鏡のように見つめていた

「こわかったよー！！」

「あ！あはは よしよし 素直ねチョコ」

ナンパされていた事が恐怖だったようだ

これはナンパを軽減させないといけないと思ったシエルだった

「で、今まで何してたの？噴水なんか見て チョコみたいな元気な子ならここで屯してないよね？」

素朴な疑問にチョコは答えた

笑顔で噴水のそばで立って堂々とした態度で言ったのだ

「ルヴィリウムがね？ここにいたらシエルに会えるっていったの！」

「ルヴィリウムね あの子は、いつもわけのわからないこというのね
でも たまーに結構当たるのよね あの子の電波な会話は」

ぶつぶつとシエルは口にした

「天然で電波なルヴィリウムを相手にしていたらきりが無いわ

今日は...そっか、お父様の演説だったわね」

チョコはまた笑顔で寄り添い左手に寄り添い繋ぎ合おうと

「そうなの！ チョコ シエルと行きたかったの！はやくはやくいこいこ！」

シエルとチョコは噴水から北の方角へと向かっていった

「今日は皆のもの よく来てくれた 礼を言おう」

「早速始まってたわね 私 娘だけど忘れたわ お父様も言ってくれればよかったのに
それとも私が忘れていないと信じてたのかしら」

ざわめいた会場では既に始まっていた
ジェミニの演説が始まっていたのだった

「世界が平和になってから 幾年の時間が過ぎた！

かつては 聖神教と邪神教との争いがあった事を知っているだろう。」

ジェミニの演説の真ん前には銅像があった
人の銅像だ ジェミニにそっくりの銅像だった

「幾多の犠牲があった

その中で聖神教の自滅によって
邪神教の勝利に収まった
悲しい出来事であったようだ
無論 私は戦を経験していない

私の祖父らを経験していたのだからな

そして
邪神様の命によって 世界は統治されていった。

邪神様の像だけが生き残りここに保管されている

聖神様は既に滅亡と共に散った。

邪神教ではあるものの
神に頼らない 頼ってはいけないので
みな 自立した生き方 自由な生き方をして
満喫している。

そう 私は思うのだ。
邪神様だったのは私の先代なのだ 私によく似ているのもその為だ

この広場でも
聖神教だった者たちもいるだろう
だが今こうして仲良くやれている事を今一度実感してほしい
そして仲睦まじく 生きてほしい と私は思う 以上だ」

民達は歓声を上げていた シエルも声援を出した

「いいわよ！お父様！その調子その調子！」

「はわわ！シエル！応援と違うの！」

ジェミニの後ろで誰かが立っている事にシエルは気づく

「ん？誰かしら？変ね 私そっくりじゃない...てか私じゃない！？」

「あれれ？シエルなんであそこにいるの？」

チョコとシエルが疑ったのは正しくシエルにそっくりの少女だ

ジェミニは気づかないのか知らないが 私の娘だと紹介してシエルと呼びしものを前に出した

「みなさーん？元気してますかー？毎日遊んで暮せてますかー？
私はみなさんのおかげでくらせてまーっす」

ジェミニと国民は苦笑いをする その言いぐさはやや問題だったようだ

「シエルやばそうなの ねえねえ あれ？シエルどこなの？」

チョコが気が付く前にシエルはどこかへ見失っていた

「私たちのお金なんだと思ってるんですか」

不満が零れていく会場にひしひしと冷や汗が集うのだが
そこにこれまたそっくりのシエルが一人乱入した
これにはジェミニが驚きシエルの方は笑顔で出迎える

「あらあらシエル様じゃありませんかー？どうしたのですかー？」

「あらあらじゃないわよ！ルヴィリアム！もう！返しなさい！私のドレス」

シエルそっくりなルヴィリアムのドレスをシエルは引っぺがす 破っているのだ
その光景に 国民はざわめきだした

「おい！シエル何をするのだ！やめんか！公の場だぞ！？正気か！？」

ジェミニも娘の失態に冷や汗をかく

しかしそんな行動はすぐに理解する事となった
ドレスを破ると シエルの外見が変わり別人へと変わった 服装もドレスではなく
町にいそうな少女だった

「やっぱりね ルヴィリアム？」

魔法でルヴィリアムは変身させられていたんだわ いったいだれのせいかしら？

いたずら好きね いたずら いたずら...」

「いたずら...っていやぁ...」

国民とシエルは一緒になって考えた
いたずら好きな人間は一人しかいないと浮かんだのだ

「マニユーサね！あのいたずら魔女なのね！全くもう！」

マニユーサはいたずら好きで有名で色々な魔法で世間を騒がしてしまい
しまいにはいたずら魔女と呼ばれるようになっていたのだ

「話は聞かせてもらったぞ 聖神教と邪神教との争い まだ終わっていないのではないか？

聖神教がいる時点で争いは止まらないぞ 今ここでその人間を察知して破壊させるものを
完成させたのだからな」

今度は何だ？と皆が思う中 砲台を持ってきたのは
邪神教のルドレストだった

「に、にげろー！」

国民が逃げていく中 策略家のルドレストは冷静に砲台に着火させて
そして爆発した

しかし、その爆発の矛先は自分だったのだ

「な、げほ げほ」

ジェミニとシエルは二人して溜息をついた

「で、ルドレスト 誰と協力してつくったの？」

「そんなの決まっているだろう？マニユーサだよ あいつは素晴らしい魔女だ
いたずら魔女と呼ばれるには惜しい存在だ そう思わないか？シエルよ」

シエルは思った

「確かにマニユーサは良い魔女だと思うわ
だけどね？ 少しいたずらが過ぎると思うのよ

それに あなたのそれ 多分マニユーサがわざと失敗作につくってるわ」

はっと気づいた ルドレスト 何かを思い出したかと思うと

「あの小娘～～！」

と言った瞬間だった

「呼ばれてしまったじゃーん！ほらほらー 私がマニユーサだよーん いえーい！」

いたずら魔女は颯爽と現れて ルドレストへと近づいた

その後 空を飛び離れていくマニユーサへルドレストは持っていた爆弾をマニユーサへと投げ落としていった

投げ落とす数によって建物は破壊されていった

「勘弁してくれ」

「お父様 いつものことよ おちこまないで...」

(まあ マニユーサのおかげもあるわね
あの策略家のルドレストは本気で聖神教の人間をつぶしたがっているし

若干どちらも侮れないわ)

建物の修理代に残念がるジェミニ

マニユーサとルドレストの関係性を読み解くシエル

そんなこんなでマニユーサによってルドレストの恐怖政治は免れた
ただ、こんな感じだが 世界は平和に保たれていたのだった